

模倣ピッケル考察

ウッドシャフトピッケル研究分科会 諏訪部 豊

1. はじめに

物作りは常に先人の作を参考に進める。ピッケルもメーカーの大小に関わらず工業製品であるので常に先行する製品を参考にして作られる。つまり常に模倣が行われてきた。しかし模倣にも程度があり、形状や製法を参考にする程度のもので売れ筋の他社製の「そっくりさん」を作ってそのご威光にあやかろうという物。はたまた銘まで似せようとする物まであった。今回それらをまとめて考察を加えることとした。

2. ピッケル黎明期のヨーロッパ

ピッケルは自然発生的に発展してきた。したがって当初は色々な形状があったがイギリス山岳会内部に委員会が作られ形状が統一された。海を渡って登山に来る英国人が最大の顧客だったスイスの鍛冶屋、シェンクやベントはその統一された形状をひな形にして作ったであろう。これも模倣と言えようであるが規格は緩やかなものであったので各鍛冶屋の作は少しずつ違いがある。

3. 日本の初期の模倣品

日本では昭和の初めに仙台の山内や札幌の門田がピッケル作りを始めた。当然彼らは先行していたスイスのシェンクやベントの作を模倣した。山内も門田も後には他のピッケルの影響も受け、また使用者の助言もあって次第にシェンクやベントを凌駕するような製品を作っていくが黎明期の模倣は仕方ないことであろう。

4. 戦後の模倣品

戦時中はピッケルが禁制品になったこともあり、昭和初期の日本におけるピッケル黎明期はほんの10年程度であった。戦後日本に入ってきた海外製品は戦前の画一的な形状を脱して機能を重視した物になった。特にフランスのシモンやシャルレ(共にシャモニーの鍛冶屋)の作は軽快で斬新であったので大いに人気を博した。しかし1ドルが360円もした時代の輸入品は高嶺の花だった。そこでシモンやシャルレの形状を真似た国産品が登場する。門田でさえもその流れに逆らえないほどであった。



[シモン・スーパーDとその模倣品]

5. 美津濃の「モデル」製品

美津濃は戦前からあるスポーツ用品メーカーである。ピ



[シェンクモデルの銘。中央のMODELという字が薄れている]

ッケルも作っていたがその商法は実に興味深い。それは戦前にシェンクモデルというピッケルを販売したことである。ピッケルの形状を真似ることは山内や門田も行っていたが



[シャルレ・スーパーコンタ2とその模倣品]

銘を真似るといのは実に堂々としたやり方であった。興味深いのは銘は良く似ていたがピッケルの形状はあまり似ていなかったことだ。



[サースアルマーゲルモデルの銘]

美津濃にはシェンクモデルの他にサースアルマーゲルモデルというのがあった。アンデンマッテン兄弟(スイス・サースアルマーゲルの鍛冶屋)作なので本来はアンデンマッテンモデルとすべきであろうが当時は所在地名で通っていたのでサースアルマーゲルモデルとしたのはご愛敬か? シェンクモデル同様にこれもオリジナル品に似ていない。